小説・ハイデルベルクのジャン・パウル（1929）
（連載第 3 回・最終回）注
作：ヴァルター・ハーリヒ（1888 ― 1931）

飯　塚　公　夫　訳

第四章　一日（前回よりの続き）

隣室から、慌てて何かやっている音、ガラスや小箱をガチャガチャ・カタカタさせる音、ホテルの従業員へなされる押し殺したような命令の声が、聞こえてきた。数分後シュレーゲルが入ってきて、数通の急ぎの書簡のせいで遅れてしまったことを詫びた。書き物机より、化粧台の香りの方がしていたのにである。昨日の振舞を説明しようとするジャン・パウルの試みをはなから慇懃に遮るのだった。「承知しておりますとも、公使館参事官殿、承知しておりますとも。神経が参り、疲れが出て、どうしようもない、こういうわけですね！」と。昨日の状況を冗談話にしてしまおうとすら試みて、ミューズの訪問についても、こちらの方がたぶん騒々しい集まりの方より優先されねばならなかったのだろうと、ふざけた調子で語るのだった。要するに、ある程度楽しげな同席となっていたのであり、ジャン・パウルは、最初の出会い以来シュレーゲルと結びつけていたあのぞっとするような印象はどこへ行ってしまったのだと、自問する誘惑に絶えず陥っていたのだった。お殿様（グランセニョール）的態度振舞及びライフスタイルを、維持し続ける懸命な努力ぶりを見せつけたり、自分という人間の特異性を、故郷ハノーファー時代から長い一生を通じて保ち続けている「シュ」と発音すべきつづりの一部を「ス」と発音するやり方におけるように、大事に大事にしているちっぽけな特徴で強調したりするこのコチコチの老紳士を見ていると、他ならぬここでもまた、フランクフルトですでに弟と和解させてくれてい

た「人の心を打つ要素（モーメント）」というものを、確認せざるをえなかった。なにせこのお殿様（グランセニョール）とて、ひいひい言いながら世界史の岩ずれ部分に無理矢理体をねじり込ませて押し通って、自分の存在を主張しようとする哀れなペンの騎士にすぎなかったのであり、どうもお付きの従者の助けなしに骨身を削って手入れをしたらしいこの人の髭を目の当たりにすると、この人の作家生活もまたきっとそれに富んでいたであろう、またひょっとしたら今なおそうであったのかもしれない多くの屈辱に思いを致さざるをえなかったのだ。今となれば、老いという庇護の力のおかげで、最後の安らぎを得ることができていたのではなかっただろうか。この力は、この敵からさえも、おぞましいところを取り去っていたのだった。また、ここからは、もうどんな「おぞましさ」からも解放されているという方向へ向かって、慰めの終止符が打ちえていたのではなかっただろうか。あらゆる種類の情熱が殺到してくるのを防ぐ防壁であるかのように、身のまわりにぐるりと築かれているものがあった。ひょっとしたらもはや、宇宙的永劫的仲間である義務すらなくなっていたのかもしれなかった。

そんなわけで、明るいうわべの陰に、まだそれと裏腹のあらゆる声が、ざわめいていたのだった。まだ心の奥底で『我々の感情の常緑性について』、運命というもののこの世のものならぬ確実性について、感じるところが何がしかあったのだった。友とともに、ハイデルベルクの静かな古くからある路地裏を通り抜け、おびただしい思い出に向けて弓（アーチ）を引き絞っているように見える橋を渡って、城山（シュロスベルク）の麓をよぎっていったときにはである。夏が重々しく絢爛豪華に輝いている中、満ち満ちたエネルギーによる高揚感を覚えていたが―それからまた橋を逆戻りして、古くからある路地裏の気の置けない狭隘さを通り抜け、そこからより新しい市域へと入っていったのだった。しかし、やがてわが身がパウルス家の慣れ親しんだ小部屋に腰を据えるに至ったとき、このように宇宙的永劫的仲間であるということは、一体どこに置き去りにされていたことだろう。愛すべき夢うつつの教授及びその夫人と一緒だったが、夫人はやむことなく尊敬の気持を断言したり、具合を尋ねたりして、自分が、旧友の昨日のすっぽかしを悪く取ろうとはいかに思っていないかを、繰り返し何度も暗示し

た。いやそれどころか、娘が、ひょっとしたらお世話の必要があったかもしれないお方のもとを訪ねることは、自分はいかに大いに是認しているかということを巧みに織り込んだりもしたのだった。何人かの教授のカリカチュアを大はしゃぎで真似しまくって、ジャン・パウルすらもそのように戯画化して作品化し、笑いの種にしてやるから見ていなさいという 、この愉快な若い娘に、魂の永遠の出会いといったようなものを、何かしらまだ感じていただろうか。ゾフィーは、目をきらきらさせて彼を見据え、その手で彼の腕に触れ、彼が手を伸ばそうとすると、さっと引っ込めたのだった。フォスは、昨日のことはすべて荒涼とした夢にすぎなかったのだと思っており、ジャン・パウルとて、こんな現実に直面すれば、まずもって、どうなっているのかと混乱に陥らないようにしなければならなかった。相変わらずゼラニウムの株は、前年同様窓台に置かれていた。そのとき彼は、ここで女性たちと一緒に薄明かりの中腰を下ろし、ゾフィーがその手を彼に委ねたのだった。優しく握ってくれるようにと。すべてが一変してしまったようだった。ここにはもはや、彼がこの場で前年口にしたことばは、「彼、彼のみが、神のごときヘルダーの死以来、まだそれを保持し続けている」ような、過去のものとなってしまったあの人類の理想と、ハイデルベルク・ロマン派の力強い衝動との融合は、何の気配もなかった。むしろパウルスは、ヘーゲル教授のベルリン招聘のことを語り、その際、考えが次々とつながり出てくるのだったが、それはジャン・パウルの世界から遥か隔たったところへ向かっていき、彼の抱くドイツの夢に対して、エスカレートさせた抽象的なプロイセン的国家像を高く掲げて脅かすのだった。そして不運にもこのときフォスはさらに、前年の学生組合（ブルシェンシャフト）の学生たちの松明行列は、ヘーゲルの精神で保守的国家意識を活性化させることをしきりに喋喋する同郷学生会（ランツマンシャフト）の抵抗を排して行われねばならなかったことについて、報告に及ばざるをえなくなってしまったのだった。

そんなわけで、ハイデルベルクには求むべきものは、せいぜいほんのわずかしかなく、すでに去年の夏には、たぶんそう思っていたほどには、若き学生諸君の偶像ではもはやなくなっていたのである。そしてまさにあの同郷学生会の

縁なし帽を頭蓋に載せていたわけだが、これはひょっとしたら今年は、もっとずっと当然なこととして、シュレーゲルが、松明行列に際して頭に被ることができていたかもしれなかった。馬鹿な。彼ならそうはしないだろう。むしろ階段のところに立って完璧なスピーチを行うだろう。ひょっとしたら今年の学部長たちは、シュレーゲルを名誉博士に任じることに関しては、すでに相談済みだったかもしれない。そうであれば憤慨の種になっていたことだろうが、それはあの人格のせいではなく、時代の方向性がそこに表われているからだった。どんな奈落に向かって突き進んでいたことか。ヨーロッパを永遠に分裂状態のままにしておけというのか。そのような危惧を明言したとき、そしてそれを機に再びゾフィーの目は、食い入るように彼の唇を見つめて離れなかったが、そのときに友人たちから彼に施された強力なる慰めといえば、「新時代」を拒否するように頭を横に振る動作をしてみせたり、新しいものの殺到を前にして年寄りっぽく逃げを打つ身振りをしてみせたりする程度のものでしかなかった。そこで彼は、すでに高じていた声を落として、同じように、憤懣やるかたない拒否の態度へと、滑らかに移行していった。そしてそれを機に、ゾフィーの視線は再び消滅したが、彼は、老人たちとの心地よい結びつきを大事にした。

穏やかにこの日は流れていき、それはすてきな一日とすら呼べた。なにしろ晩になるとさらに、至福の『ヘスペルス』時代の若かりし日の古き友クリュートナー女史との散歩が、城のテラスへ向けて行われ、それから再び「カールスベルク」で『自叙伝』に打ち込み、時々ビールのジョッキのおかわりのためにベルをちりんちりんと鳴らしていたのだから。そしてその際、文章が全くすらすらといってくれず、朝書いた四つの文章の先に進めないでいたとき、ついに心の中の嵐に気づいたのだった。ゾフィーの控え目ぶりは、自宅のマホガニーの鏡の像よりもおぞましいものだった。作家は、ゲートががちゃりと音を立てて閉ざされた感じがして、突然「人生の至福のときは終わった」という一言が浮かび上がってきた。それ以上は何もなく、ただずっとこの「人生の至福のときは終わった」の一言だけだった。もはやいかなる年輪も、溢れ出る樹液から湧き出ることはなしだ。彼は思い描かざるをえなかった。自分が彼女とどこか

に二人だけでいて、彼女を抱きしめようとするさまを。すると彼女は、ひょっとしたらキスと抱擁はまだ我慢してくれるかもしれなかった。おのれの「ジャン・パウル」体験の担い手である彼に対する、彼女の昔ながらの服従からだ。しかし―それほどはっきりと彼はこのことを感じたのだった―彼女の唇が彼の唇に押しつけられることはなく、暴力的に荒々しく迫ってくることで、力強く問いかける彼に答えるということはもはや一切なかった。彼は、昨日の涙によって何か取り返しのつかないものが洗い流されてしまっていたのだと感じていた。一人の人間が彼に対して自己を閉ざしてしまっていた。しかし一人の人間というのは、一つの世界であったのだ。死滅しつつある彼のエネルギーが、取り消しのきかない老いというものに抵抗した。彼は足を使ってテーブルの下で彼女との接触を求め、空想で彼女の胸の飾り布（スタマッカー）をはね上げて、彼女の首に接吻しようとし、彼女の頭が後ろに反らされるのを見た。若さよ！若さよ！もう一度革命の警鐘を、『ヘスペルス』の中でのように打ち鳴らせ！なにゆえこのように、時代の意志の中に、我慢しながら服従していってしまうのだ！彼はすでに一度、『ティターン』の中で、時代の車の幅（や）の中に身を投じて、世紀に待ったをかけていたのではなかったか。やめてしまえ、こんな『自叙伝』で振り返ってみることなど、やめてしまえ！もっと大事なことがなされるべきなのだ。もう一度現代史の一章が書かれるべきなのだ。新たな長編小説が！もしすべてを打っちゃって、新しいところを訪れ、新しい風景を知り、もう一度頭から始めるとしたらどうだ！もう一度若くかぐわしい人生（いのち）をわがものにし、もう一度子供を作り、若い肉体が、果実で、自分の果実でたわわになるのを見るとしたら！　一つの人生を彼は、バイロイトの陋屋の家族のもとで犠牲にしていたが、作家というものはいくつかの人生を生きなければならないのだ。これがゲーテの秘密だった。ゲーテのゲーテたるところだ！何がゲーテだ！　自分だって、自分だって、更新讃歌を歌っていたのだ。彼の貧民弁護士ジーベンケースのように墓穴に横たわり、新たにそこから、第二の至福の存在へと蘇るのだ！死んでそして復活するのだ！

霧の中にあるようにして、彼のバイロイト生活を彩る人物たちの姿が見えて

いた。カロリーネの輪郭のはっきりした横顔、苦々しげに反り返った口、子供たち。これみな、何と遠くの存在であることか。別の世界の存在か、はたまた、まだ生まれ出てきていない存在といったところだ。突然長女のエマが彼自身の顔になっていることに気づき、幾山河越えたそこに彼を繋ぎとめている縄の存在を感じた。呻き声を上げながら窓辺へ赴き、これらの幻影を払いのけようとした。

この夜は、ほんの少ししか眠れないのはジャン・パウルの番だった。ひょっとしたら、わっと泣き出せることが出来るのであれば、犠牲はいとわなかったのかもしれなかったが、この解決方法はまだ与えられてはいなかった。『自叙伝』の続きが、彼の考えを再びある一定の方向へ遮二無二向かわせたのだった。考えようとしていたのがゾフィーのことであれ、新しい長編小説のことであれ、それを考えているうちに、突然何かにぎゅっと摑まれている感じがしていた文章が、産み落とされようとしていた。よく訓練された器官が、揺るぎない確かさで、機能していたのだ。こうなると「創造」とは何なのだろう。書きはじめていた作品が、自動的に続きを生じていくことなのか。それとも、新たな体験のことなのか。こんな問いかけをしながら、結局朝が近づくころになって眠りに入ったのだった。

第五章　婚約と旅立ち

翌朝、ジャン・パウルがまだ朝食の食卓にあったときのことだった。フォスが、計画していたヒルシュホルンへの遠出へと彼を迎えに来る直前のことだった。ボーイがカロリーネからの手紙を持ってきた。昨日遅くに騎馬郵便で届いていて、受取人とともに、一つ屋根の下で徹夜していたわけだ。彼はこの手紙はほんのざっと目を通すことしかできなかった。丁度フォスが入ってきて、身支度をしたからだった。

しかしカロリーネには何を書くことがあったのだろうか。さしあたっては子供たちのことだった。ミュンヘンから手紙を書いてよこしたマクスのこともあ

った。そして、食堂の壁が白く塗られてからは、もうずっと前から彼の望みだったように、朝も晩も邪魔されることなしに自分の思索に耽ることができるよう、彼の部屋の隣に、彼専用の小さな寝室づくりが始まっている。自分は彼を自分のそばから手放すのはいやでいやでたまらず、彼の愛すべき寝息が自分の隣にないのはさびしいのだが、たぶんそうする必要があるのだろう。そしてひょっとしたら―ここに至って、この手紙は彼の心を引っ掻き回しはじめた―こんなことを言ってももう詮無いことかもしれない。自分は、彼がどうしても自分から身をもぎ離して、いまではもっと強烈な魅力で彼を誘い出すことができる例のあの人物に向かって行きつつあると感じている。ああ、自分だってかつては、今のゾフィーのようだったのだ。何にでも感じやすい若い娘で、情熱的に彼の足下にひれ伏し、その両手に接吻していたのだ。

ここまで読んできたそのときだった。シュレーゲルも部屋へ入ってきた。遠出の支度をしてはいたが、それはいずれにしても、危険を伴う田舎へのピクニックといった類のものではなく、むしろ散歩を匂わせる程度のものだった。半ズボンと洒落た半長靴というわけではなかったが、それでもご立派なグレイのスプリングコートに身を包み、首には緋色のリボンが巻かれていた。ジャン・パウルは、この姿を見て、遅ればせながら、自分自身が擦り切れていないビロードの襟飾りの付いた新調の青いジャケットを身に着けていたことをよしとし、なおも手紙の最後のページを素早くざっと黙読して、自分が決定的なものを読んでしまったことに気づき、このこだわりに対する同情と怒りのため、心はきりきり舞いさせられてしまっていたが、シュレーゲルに挨拶すべく立ち上がらざるをえなかった。この瞬間、何台かの馬車ががらがらと音高く車寄せに入ってくるのが聞こえ、幟や旗の色とりどりの色彩が窓の中へ飛び込んできて、礼装の学生たちが、階段の両サイドに立ち並び、当時は学長代理だったおでぶのヘーゲル教授が、四人の学部長を従えて、式服着用とまではいかなかったが、それでも晴れ着姿で入ってきて、ハイデルベルク大学を代表して、二人の賓客に、自分たちの名誉博士（ドクトル・ホノーリス・カウサ）とフォン・シュレーゲル教授に、二人の「不朽の詩人（ポエタース・イムモルターレス）、世紀の光と輝き（ルーメン・エト・オールナーメントゥム・サエクリー）、美徳の誉れ（デクス・ヴィルトゥートゥム）、

才能の王者（インゲニイー・ブリーンキベース）」に、挨拶をし、有名なる愛すべき川を行くお祭り気分の船旅へ招待した。握手した手を揺すりながら、ジャン・パウルが丁度今もとの所に押し戻した皿に載っていた蜂蜜を賞賛した。個人的には、質素倹約の方は好むところではなかったのにである。フォスはこの不意打ちが成功したことで喜色満面だった。なにしろ彼は、小メンバーによるほんの気の置けない旅なのだと思わせていたわけだから。

どんでもない。それは、公的祝典につきもののすべてがある、大メンバーによる大旅行だったのだ。外では、学生たちが、学生組合員たちに同郷学生会の連中たちが、馬車のところまで左右に垣を作り、一つの歌を歌いはじめ、出て来るものたちに向かって縁なし帽を振った。そこで、がちゃがちゃと音立てての馬車の山下りとあいなり、橋のたもとを素通りして船着場へ向かったのであるが、そこは、オークの葉で飾り立てられていて、三角旗が上方ではためいているのだった。今回は 2 艘だった。それぞれ人員 80 人で、帯状に連なるカラフルな三角旗までオークの葉で花冠が施されていて、背後にはまたしても、ファンファーレを吹き鳴らす楽士を乗せた小さな伴走船である。船からも桟橋からも、集まった群衆からも、万歳が叫ばれ、ハンカチや帽子が振られる。そして、二人の賓客が、ジャン・パウルが先になって、船に足を踏み入れたとき、全員が起立して、まだ陸上にあったヘーゲルに対して、万歳を一つ唱えたのだった。

かくあれば、瞼が涙でいっぱいになるのもむべなるかなではないだろうか。ライトブルーの空の下の夏服の教授連、学生たち、ご婦人方、お嬢さんたち。岸からは廃墟が挨拶を送ってよこしていた。散歩する人々はこちらに向かって手を振り、ストリートキッドどもは叫声を発して縁なし帽を頭上高く投げ上げていた。それはなにがしかの機関のただの催し以上のものとなっており、自分たちの偉人をことほぐ民衆という域にまで広がりを見せていたのだった。そして、船の漕ぎ手たちすらも、奴隷のようにして持ち場に座っているのではなく、たっぷり稼げるせいで、浮かれ顔となっていた。水がごぼごぼという音を立てて舷側に当たり、船がふんわりと動きつつ揺れはじめるその間に、賓客二人は、自分たちの―離れ離れとなった―席へ案内された。そのときまでどれほど握手

が行われたことか。旧友たちを見つけての喜びのひとときだった。今や全員が、船の端から端まで達する長いテーブルについていた。顔は輝いていた。美貌を基準にヘーゲルが選りすぐった二人の女の子が、ジャン・パウルの帽子を取ると、それに葉飾りを施して再び戻した。それは、船がおもむろに動きはじめ、上陸用桟橋から方向を転じて、今や岸が遠ざかり、渦を描く水が船板と陸地の間に押し入ってきて、小さな泡ぶくの渦巻が緑色の流れの上に形作られ、その流れがそのときはじめて船体をしっかとその背に受け止めてそれを運び出す、その間のことだ。そして今や、陽を受けて輝く水面（みなも）が、開けた視界の先に横たわっていたが、それも、幅広い帯として続くものの、陽光を受けるうちに、輝く塵乃至動き戯れる光へと溶解していった。家々は踊りながら退場し、新たに登場するものは、緑の窪地に埋め込まれては、すいすいと通り過ぎていった。真面目くさった森たちは、樅の木の先端を一番下にして、水の中に沈んでいった。ネッカーシュタインの廃墟からハンカチが振られていた。幸福そうな人々が草叢に横たわり、両腕を翳していた。魔法の光線のように、滑り行く船から発せられるものがあり、それは、銀の糸でそうするかのように、移り行く川岸を引き寄せて、それにぴりりと電気をかけていった。その結果川岸は、そこにいる人間やそこにある家々、牛たちともども、踊ったり宙に浮いたりせざるをえなくなった。山からの道は、カーヴで下っては、また弓なりに上がるというものだったので、荷馬車がその道をガラガラと通るときは、それだけでもうお祭り騒ぎのきっかけとなった。

シュレーゲルが入ってきた際カロリーネの手紙を素早くポケットに押し込んだときから、ジャン・パウルはまだ正気に戻ってはいなかった。すべての人の顔が自分を囲んで輝いているこういう朝に、どうして自分自身が輝かないでいていいものだろうか！人間に面と向かえば、そうそう勝手はきかないのだ。全くの他人だったら、うれしそうな表情であれ、不機嫌な表情であれ、どうでもいいといった表情であれ、自分の思いのままにしてみせて構わないだろうが、その人のグループとひとたび、大変肩に力の入ったような気の持ち方でめぐり合ったような人には、またもや飛び切りうれしそうな顔をしてあげなければな

らないのだ。なぜなら、自分の心はどうであれ、彼らの期待がそうさせるからだ。ジャン・パウルは自分の心の中がどうであるのか、一向にわからずにいた。たくさんの人々の中で自分の席に座って、入れ代わり立ち代わり人々に囲まれ、握手とか本へのサインとかを求められているうちは、心地よい安全圏にいる感じがしていた。揺れる船の船板の下では、際限なき原初の自然がぴちゃぴちゃと音を立てていたが、この船上にあったのは、ただもうお祭り気分の浮かれ顔ときらきら衣装と喜びと陽光ばかりだった。今日は、ほんのついこのあいだ、数日前のマイン川の旅のときのように、老外交官とともに人を避けて、老いの身の不如意を託ち合ったりしたいといった気には少しもならなかった。またたとえその気になっていたとしても、それに身を任せる機会はなかったことだろう。

帽子にオークの葉飾りをしてくれた女の子の中には、ゾフィーはいなかった。彼女は、波のように絶えず作家のまわりに寄せては返すようにやって来る普通一般の女性の仲間には入らずに、一人ぽつんと離れたままで、それが彼女の生まれついての性質なのだが、ただ普通でないものとだけつながりを持とうとしていた。前方の船首部分に座って、岸辺のお祭り気分とジャン・パウルの隣に座る母の表情にかわるがわる視線を向けていたが、今日という日は作家と距離を置こうとしているかのようにみえた。しかし結局のところ、それでもやはりこちらへやって来て、岸辺の家々や木々の並びを手で指し示して、名前を言ったり、散歩で縁のある特別な場所の説明をしたりした。そこでジャン・パウルはまたしても彼女という存在（にんげん）の持つ雰囲気に絡めとられてしまっていたが、彼女の方は、控え目に引き下がることと打ち解けた友だちのように振舞うことのバランスを巧みに保ち続けていた。しかし彼女はシュレーゲルのところにも行っていた。彼は彼女を探し、度々その腕を摑んでは、内輪といえる知人たちの所へ行き、彼女と一緒のところを、ご披露に及んでいた。そうやって彼女は、若い女の子の自然な態度を保ち続けていた。人生の祭典のいまだ名もないお飾りではあるが、いつでも、一人のエリート男の名前と位を担うものとして登場する用意があるというわけだ。このときはまだ、立ち入られることも立ち入る

こともなく、人々の列をあちらこちらとことばを交わしながら通り抜けて行っていたその彼女が、何か一言言われることで、あっという間にある新規のお祭り気分の中心人物となってしまうようなことはないと誰が言えただろうか。ジャン・パウルはあると思った。彼女と話したとき、ほんのちょっとカモフラージュしただけの心の準備が見通せたのだ。また、彼女がシュレーゲルと腕を組んで歩いていたとき、彼はそう思ったのだった。ポケットの中のカロリーネの手紙に気づいた。この女（ひと）は遥か遠くの存在となっていた。ここにいる人は誰一人彼女のことを考えてはいなかった。彼女を知っているものはほとんどいなかった。目にしていたのは、情熱的に話をしている男と今を盛りの美女だった。カロリーネはどこに行ってしまっていたのだろうか。

こんなことはまだまだ朗らかな気持で見ていられる児戯であって、これは夢かという思いといや違うという思いの間で揺れているのだった。しかしながら、目的地に着いて、船旅後に足下で揺れ動く陸地が、客たちをあちらこちらに分散させ、陽が燦燦と降り注ぐ草地の傍らには森の暗がりもまた突如として逃げ場を提供してくれている今となっては、それはどうなっただろうか。板組みの足場には、楽隊が陣取っていて、メロディを遥か彼方まで高らかに鳴り響かせていた。学生たちの中で女の子たちの前で目立とうとするものは、楽隊の人々にビールとタバコを持って行かせた。するとそのお礼に彼らは、頬を膨らませて管楽器を思いっきり吹いたり、ティンパニーを力いっぱい打ち鳴らしたりした。草地の畦道を歩くものあり、何故かは知らぬが緑色の水流が渦を巻いてよぎっていく岸辺に立つものあり、森の静かな道を求めるものありだった。200人の人々がすでに村一つ及びその周囲をいっぱいにして、この土地の魅力に誘われるままに身を任せてばらばらに散らばりつつあるのだが、長い間座っていたあとでは、歩いて足をほぐさなければならなかったわけだから、それはなおのことだった。数人のすばしっこいものははやもう、城壁まで森が迫っている城跡に攀じ登っていた。どのグループのなかにゾフィーは見つかっただろうか。ボーイフレンドの年齢に擦り寄るべきだったろうか、それとも軽やかに飛翔して魅力を振りまくべきだったろうか。彼女が余人と同じようであれば、森のは

ずれに群れる人たちと一緒にはしゃいでいたことだろう。しかしこの我の強い娘に、一緒に遊んでくれたり一緒に花環を編んでくれたりする遊び仲間の輪舞の場がどこに見つかっただろう。この奇妙な被造物(むすめ)が彼の方へなびいてきたのは、孤独からであって、楽しいからではないのだと気づいて、またぞろ胸塞がる思いをしなければならなかった。

野天でのご馳走が終わってから、年配のものたちも遊びに加わるようになったときはじめて、彼女は再び奔放な躍動を示しはじめ、「子山羊さん余所見をしないで遊び」のときには、顔を火照らせて服をたくし上げながら芝生を走り回り、彼の方にきらきらした視線を投げかけて、必死に合わせようとしているものの思うように体が動かなくなっている男をからかった。彼らはことばを投げかけ合い、おそらく数瞬は並んで立ちもした。それは遊びが彼らをくっつけたり引き離したりするような具合だった。二人の人間がお互いに相手を求め合っている確かなしるしの最たるものは、彼らがパーティに群がる人たちの中で何度も何度も出くわすときだ。人の注意を呼び起こさないように離れていっても、すぐにまたすれ違ってしまい、自分が相手を求めていたことに、交々我ながら驚きつつ、またぞろ背を向け合うのだった。

コーヒータイムのあとは森へ散歩が行われた。このときにはグループはより固定されたものとなっており、年齢と体力によってまとまっていたが、それでも全行程にわたって、振り返って見たり声をかけたりすることがあった。そしてついにシュレーゲルが、今日はもうすでに度々行(おこな)っていたことだが、ぶらぶら歩いているゾフィーの腕をぎゅっと摑んで自分の手もとから離さずにいたものだから、またぞろほぼ同じグループに一緒にいることになった。ジャン・パウルがクリュートナー女史とシュヴァルツ教会顧問とともに中核をなしていて、そのぴったり後ろをヘーゲルとティボーが続き、そのティボーは、ジャン・パウルとベートーヴェンを比較しての思いつきを縷縷述べて、まさに両者の猛々しい自由の意識について語り、彼らを今世紀の「獅子の頭を戴くもの」と呼んだ。シュレーゲルはゾフィーとともに、道の反対側を歩いていたが、度々会話の中にことばを投げかけ、それはあらん限りの学問分野への機知に富んだ

それとない言及に満ち満ちていた。必ずしも座を楽しませるものではなかったが、見事な友情の心と好意の気持があった。大股のコチコチ歩きでやって来るこの男の「あのおぞましいところ」はどこへ行ってしまったのか、という問いをまたしても発することができた。ヘーゲルの辛辣であると同時に冗長なユーモアを見事にバック・アップしていたのだから。

ゾフィーとの無言の戯れに、いまやすっかりジャン・パウルが、一日中もっぱら注意を引かれてしまっていたなどとは、絶対断じて思ってはならない。ひょっとしたら彼は彼女のことは、そうあってしかるべきほどにも身を入れて考えてはいなかったかもしれない。彼は自分の心の中にはあえてほんのたまにしか目を向けることはせず、また今朝のあの手紙の残した澱（おり）の方にもまたほんの盗み見程度で済ませていた。その間ずっと、能う限りの人々との会話は途切れることがなかった。そしてどんなテーマであれ、ジャン・パウルは感激させてもらえた。心の中で燻る燃え残りに、迸る大波を注げて、嬉しい気持だった。いや、これまたもう言いすぎになってしまった。つまり、バイロイトで一人ぼっちだったのち、人を受け入れ心を割って話ができるということが、ほんとうに幸せだったのであり、ともあれ感じていた嬉しい気持は、苦痛となって彼の内面の反攻に転じていたのであり、彼はあらためてゾフィーのことばとまなざしを求めた次第なのだ。

このように求めては引き退くというあり方は、どういう結末を迎えることになっていただろうか。散歩しているときは、ありがたいことにブナの木のつくる暗闇が人物を覆っていて、明りはほんのぽたぽたといった感じでしか地上に滴らせることはなかった。しかし、明るみを増していく歩みの中であんなに多くのものが再び覚醒したあと、草地に出て再びはっきりと互いの目を覗き見なければならなくなったとき、どうなることになっていただろうか。そして晩になって木星が東の空に昇ってきて、空を遊歩するようになったときには、その上さらにどうだっただろうか。すでになされていたのとは違った決定がなされえただろうか。何とまあ両人は、歩き回っているうちに、ただ彼らの運命の時計の針を若干戻しただけだったのだ。彼らはお互いもはや何も相手から望むこ

とはできなかった。断じてもはや宿命(さだめ)や転落が、この愛から出てきようはなかった。どうして彼らは、いまだに糸を投げかけ合い、そうやって出来た薄くて痛い、決してもう切れずにすむはずのない輪の中から、お互いを逃がさないようにしていたのだろうか。しかしこういった戯れを、最後の最後まではやらずにすませることができる人が、この世にいたためしがあっただろうか。

人々はまる一日を緑の中で味わおうと思っていたのだが、そういつもいつも新たなはっとさせられることが出来るわけではないということがわかってきていた。森から戻ってきたときには、太陽はすでに山の端と接していた。暗くなるまでは、これといったことが生じるべくもなかった。人々は草地に散らばって、この遠出のハイライト、城跡からの花火と、松明の灯りの下、上で行われるダンスがはじまるのを待っていた。学生たちは女の子たちとともに、一本の菩提樹の下で休息していた。そこからは、会話や高笑いの声がこちらに聞こえてきた。年配のものたちは、盛り沢山だった一日にもういささか疲れ果て、草地の中央に据えられているベンチに座を占めた。何人かのものは今やっと森から帰還したところで、暗くなっていく草地を歩いて通る姿が見えたり、森の奥から、叫んだり鬼ごっこをしたりする声が聞こえたりした。次第に全員が城跡の見えるところに集まってきた。そして、時の歯に食いちぎられたようなその塔のまわりには、細やかなかすかな霧が、薄地の紗でできた旗のような具合にして、はやもうかかっていた。ジャン・パウルとゾフィーが再会したのはこの時ここでだったが、そのときはもはや戯れのせいで、はたまた楽しい口争いによって、熱くなってはいなかった。むしろ、地面から立ち昇る宵の静けさに包まれていた。そしてその静けさが、次第にすべての事物を徐々に飲み込んでいったのだった。

「城跡はあそこから見なくてはいけませんわ」とゾフィーが言うと、彼は彼女についていき、彼女とともに、森のはずれの、他の人からはちょっと離れたところに腰を据えた。シュレーゲルがそのあとについていき、彼らから 30 歩ほど離れた木のところに立って、コチコチ不動の状態のまま、くっきりした横顔をまだ明るい空の方に向けて待っていたことは、誰にも変に思われなかった

のか。そもそも彼は二人に注意を払っていたのだろうか。彼は腕組みをしてそこに立っていた。首には勲章の緋色の綬が掛けられていた。あたかもしごく当たり前のことをしている様子で、「あなたのおっしゃることは正しいですよ。ここからお城は一番いい姿を見せてくれますよ」と言わんばかりたった。こうしてそこに立って待っているとき、彼は突如また「おぞましいもの」になっていなかっただろうか。それから彼は少し向き直って、押し殺した声でこちらに向かってこう言ってよこした。「私がここから攻城していても、あなた方のお邪魔ではないですよね。」

ゾフィー・パウルスは声を強めて言い返した。「全然です、フォン・シュレーゲルさん。私はすぐそちらへ参ります。」

そもそもまだこれから決定がなされることはありえたのだろうか。つまりそれはもうとっくの昔になされていたのではなかったのか。はやもう、彼がまる一晩闘い抜いたあと、早朝になってやっと眠りについたときには。あるいはひょっとしたらもっと前、彼があの最初の晩にカロリーネ・ベーマーのことを話したときにだったのだろうか。あるいはもう、彼が 6 マイルの最後の一歩をためらっていたフランクフルトでだったのだろうか。あるいはもっともっと遥か以前、はじめて会うずっとずっと前、彼が永劫という輪舞の中からこの星へ移植され、現実と限界の中へ鍛鉄されたときからだったのか。彼はもはや天上的輪舞の中で躍動することはなくなっていた。この地上で目を覚まして一歩一歩その苛酷な遍歴の旅を実行して、行き着くところまで行かなくてはならなくなってからのことだ。君はどこにいるのだ、ジャン・パウル・フリードリヒ・リヒター、公使館参事官、ハイデルベルクの名誉博士よ。無限に続くカーヴから、彼は確固たる円環の中へ立ち戻った。ゾフィーが隣に座っているのを見て、彼女に辛く当たるときは今だと気づいた。彼らは、相手を写し出す誘惑ゲームを、終わりまで続けなければならなかったのだ。そして再び変身して、ひとりぼっちの地上の子に戻るのだ。終わりとは？　それでは、ここに終わりがあったかのようだ。その後の彼が、夢幻（ゆめまぼろし）を摑もうとすることを、彼女の名を呼ぶことを、やめるであろうかのようだ。生の彼方にあって、この地球の遥か遥か

後方に行ってしまっている彼女の名を。ゾフィー、ゾフィー！と。

相変わらずシュレーゲルは木のところにずっと立っていた。ジャン・パウルには、このいやな男が立ち尽くしているさまを見て、何か獲物を待ち伏せしているかのように思えた。残り滓を餌にして生きていて、船から落ちてくるものに飛びかかっていく鮫だ。もし今彼が、横にいる女の子に決定的な別れのことばを言ったら、彼女はあいつのところへ行くだろう。彼にはそれがわかっていた。彼の心の目には、彼女が暗い野原をあいつのところへどんどん歩いていくさまが見えていた。一体何であんなことを言ったんだろう。こうするしかなかったんだ！このことばを彼はすんでのところで大きな声で口に出して言ってしまいそうだった。何でなんだ。それは彼女が、幸福ではなく、苦悩と転落を求めていたからだった。それは、彼女の方もまた、彼の敵のところへ行くことによって、彼に一番手ひどい苦痛を与えなければすまないからだった。

彼はゾフィーを横目で見た。彼女は目を閉じていて、きりっと結ばれた口はこれまで同様力強さがあって、形を変えなかった。ぴくりとも動かなかった。何故彼は、今このときになって突如、おぞましいこの一つの問いを持ち出さなければならなかったのか。彼はよそうとしたのだが、それは繰り返し繰り返し彼の額の奥で形成されていき、目の上の方が苦痛を感じるほどだった。ひょっとして彼女は、彼の敵のところへ、より有名なもの、貴族に列せられたもの、カトリック最高勲章の勲爵士、この地上の有力者たちと交際があり、歴史を作っていくもの、このもののところへ行ったのか。彼女は、未来はその手中にある勝ち誇ったもののところへ行ったのか。もっと言えば、彼女が彼のところへ来たのは、ひょっとしたら、ただ、彼が祝賀を受ける当の作家だったからというにすぎなかったのか。彼は頭の中を引っ掻き回して、小さな軌跡を探した。彼女は彼を愛することができたのか。表情もうつろなこの老人を。彼はバイロイトでマホガニーの鏡の前に立つ自分を見た。彼女は彼の何を愛していたのか。いつもこの問いが彼の中にはあったのではなかったか。この問いが、マンハイムの橋での接吻以来、絶えず彼をきりきりと苦しめていたのではなかったか。宇宙的永劫的出会いというのは、ただファンタジーで彼女の中に植えつけてい

たにすぎなかったのか。彼女の方は、功名心の強いこの娘の方は、ただ一番有名な男性を探し求め、その偉大な男の中に住みつこうと思っていただけだったのか。

このように思いめぐらすことで、最後の別れのことばへのエネルギーを得ようとは、何と拙劣かつ不埒なことだろう！彼の心の奥の奥の方では、「裏切りだ、裏切りだ」と彼に向かって叫ぶ声があった。自分を勇気づけるためにそんな嘘をついているのだ。しかしそのさらにもっと奥の方には、間違いなくそうだったのだという確信が磐石のごとく存在していた。すると突然彼は、この確信はいつも磐石のごとくそこに存在していたのだということがわかった。一年前から揺るぎなく背景の一番奥にあって、頃合のいいときに表に出ようとしていたのだ。これではじめて、今や至福の出会いの夢はすべて終わったのだという、変更の余地なき最終判決が下されたのだった。

二人はそもそももうお互いに何か口を利いていただろうか。彼は心の重圧に抗して、それを全力で脇へ押しのけて、正気に戻ろうとしたが、そのうち彼女と会話を交わすようになっていて我ながら驚いた。カロリーネ・ベーマーについて彼女は尋ねていたのだ。あたかもこの人の運命が魔法の力によって彼女を引きつけているかのようにだ。彼の中の弾劾・非難はすべてぼろぼろと地面に零れ落ちてしまった。違う、この娘のお望みは、苦悩と転落なのだった。それ以上の何ものでもなかった。それとも復讐か。彼にはわからなかったが、彼の唇が彼に代わって、彼の知らぬ間に答えていたのである。厳しくかつ冷たく、意識の上層では疑いを持ち押さえつけていたものの、揺るぎない確信からである。「彼女はシュレーゲルのところへ行き、彼は彼女を公然たる辱めから救ってやり、不幸にしてしまったのです。」

そのあとには、きついことさらの沈黙が続き、それがこのことばを意味深長なものにした。この沈黙はこのことばを命令にしてしまい、それに彼女は従った。何故彼女は従ったのか。彼の思いが彼女の仮面を引っぺがしてしまったのか。彼女は立ち上がり、行ってしまった。彼はこのとき彼女を無理に引き戻さなかったのか。彼女はシュレーゲルの方へ歩みはじめた。彼女を奈落の底へ飛

び込ませるということがあってよかったのか。彼は、彼女が歩を進めるのを見ていた。彼はまだためらっていたのか。彼女を自分のもとに連れ戻してくれる奇跡をまだ期待していたのか。あと一歩だ！　彼女はまだ相変わらず立ち止まらなかったのか。ゾフィー、ゾフィー！彼はこの叫び声を咽喉(のど)の奥で押し殺した。ともあれ、他人(ひと)が彼女を破滅させる方がよくはなかったか。彼は彼女がゆっくりと前進していくのを目で追った。丁度神明裁判で、しっかりした足どりで、赤熱した鉄の上を歩くようだった。彼女をあいつのところへ行かせるのは狂気の沙汰だった。全部嘘だったのだから。彼女は彼のことを愛していたのだ。それだけのことなのだ。彼をただ単純に愛していたのだ。なのに彼は彼女を敵の腕の中に追い立ててしまった。こいつはまだ相変わらず不動の状態のまま木のところに立って、彼女がやって来るのを実感していた。そこでジャン・パウルはくるりと向きを変えて、他の人々がいるところへ戻っていった。

この瞬間城跡の方からパチパチと花火がはじまった。灼熱の蛇たちが、空中にシュシュッという音を立てた。そしてパンという大きな音とともに飛び散るのである。犬のような火のついたカエルたちがお互いに吠えあっていた。城壁が緑と赤のベンガル花火の明かりの中から浮き出てき、風景は血に浸されていた。火の車輪がぐるぐると回転していた。悪魔の暴力を思わせるような、ダダダドドーンという音が谷を満たし、火花が束となって塵のように降ってきたが、その向こうには、突如黒く恐ろしげなものとなって、夜空が控えていた。このとき松明の灯りが赤く燃えて旅亭からこちらへ近づいて来て、2 列縦隊 40 人の松明持ちが客たちを挟み込んだ。先頭の方では音楽が高らかに鳴り響き、そうやって行列は上の城跡目指して動きはじめた。上からは火と燃える蛇たちがシュシュッという音を立てて上がり、巨大な影を森に投げかけていた。灼熱の瀝青が松明から地上に滴り落ち、煤けたガスが人々の回りで渦を巻いていた。笛が高らかに鳴り響き、ティンパニーは世界に亀裂が生じそうなくらい力強く打ち鳴らされていた。こういったいくつもの灰色の、そのすべての中を、頭を高々と上げて悠然と歩いていったのだった。ズボンが長靴からちょろりとはみ出すと、親切なシュヴァルツ教会顧問が時々それを再び中へ押し込んでやる役

回りとなった。ドイツの青年たちが松明を振り回した。これらの学生組合員たちの中の誰がカラフルなひもつきジャケットを着用に及んでいるのか、誰にわかろうか。大地は、沸々と湯気を上げゴーゴーと鳴り響き、その上で思う存分暴れまくる地獄の下で、処女地のまま横たわっている。今日は雨が降っていないので、そのまま、「獅子の頭」を威張ってもたげていられる、とはティボー教授の言うところだった。行列は轟音とともに橋を渡り、松明の光が 100 フィートの暗闇の底に落ちていった。城門が開け広げられて、巨大な高さの蜘蛛の足を、通り抜けていく火の流れの上に広げた。このとき壁が後ずさりし、光の大波が荒れ狂いながら城の中庭を通っていった。瀝青の大鍋（これから松明の火を取る）から火柱が高く立ち昇り、夜の天蓋を持ち上げた。

ここがダンスフロアーと定められた。周りにはぐるりとベンチが置かれオークの葉で飾られており、旗に囲まれていたのは楽隊の演奏台だった。相変わらず全体のつながりはつかめていなかった。今はまだ、ゾフィーとともに、あの女神のような娘とともに、森はずれに腰を据えていたのではなかったのか。このとき炎がすべてのものから覆いを引っぺがしたのだった。向こうに悪魔のような横顔のシュレーゲルが、ゾフィーと腕を組んでいる。今こそ自分に対して万歳が唱えられるのではないのか。脚を広げてそこに立ち、笑っている。ヘーゲルが肥満にもかかわらず、敏捷に演奏台に攀じ登って何か語る。カップルへの万歳か。大声で叫ぶ声が物凄いどよめきとなり、反り返った薪の輝きに城壁が揺らめき、ときには光が塔の高みまで攀じ登ることがあった。万物の原初のとき以来知っていた顔が見える。少し青ざめて、目には翳りがある。そしてその横には「敵」が見える。勲章の綬に手入れされた髭が掛かっている。彼は祝辞への感謝のことばをキーキー声で言う。そして昨年の愛すべき馴染みの顔たちの中に、燦然たる輝きを放って座っている。

愛すべきハインリヒ・フォスの裏切りを知らない目をその顔に感じていたが、その顔は、それからもうダンスが三つ終わったときに、外へ出て橋上でくずおれて、頭を欄干に押しつけたときにも見ていた。彼は横に並んで立ち、その優しい手で髪を撫でてくれるのだ。「友よ、友よ！」とつぶやきながらだ。ああ、

彼はわかっていなかったのだ。ギムナジウム最下級生のように泣いているのは、「不幸な恋」ゆえなのだと思っているのだ。そのような形で泣くことができるのであれば、幸せの極みであることだろう。もっとはるかにひどいことに打ちのめされていたのだ。生命（いのち）を一つ踏み潰さなければならなかったのだ。一人の人間を、残りの人生の平安のために犠牲にしなければならなかったのだ。足もとにひれ伏して両手に接吻した今現在のこの若い娘を、かつて足もとにひれ伏して両手に接吻した昔の若い娘の犠牲にである。カロリーネよ、ゾフィーよ、君たちはみな、人生の奥に潜む偉大なもの、暗黒なもの、未知のものの前に身を置く。ところが、どんな女もそうではないし、どんな男もそうではないのだ。それは夥しい数の姿をまとって誘惑する。宇宙的永劫的仲間の姿で、永遠の至福の出会いの形で。それでいてまだ相変わらずそのずっと背後にあるのだ。大きい、暗い、不確かな形で。

この年フォン・シュレーゲル教授は、パウルス家の隣にあったシュヴァルツ宗教顧問の館に、客として移っていった。公使館参事官リヒター（ジャン・パウルのこと）は、まだしばらく「カールスベルク」に滞在を続け、そこのホテルの庭で大いに仕事を行った。家に戻って、最後の大長編小説、―これは断言できるわけだが―もはや完成を見ないであろうそれに取り掛かる前に、『自叙伝』の青春物語の部分を書き上げねばならなかったのだ。結局彼は、パウルス嬢の結婚式の直前に旅立った。この結婚式が彼の心に痛手となっていたからではなく、何かある恐ろしい出来事を予感し、その目撃者となることを避けたかったからだ。

帰途彼は再び数日フランクフルトに滞在したが、訪れたのは旧友ヴァンゲンハイムのところだけで、「公使館参事官並み公使館書記官」フォン・シュレーゲル勲爵士がまたぞろ彼らの邪魔をすることがないように事前措置を取っていた。なにしろシュレーゲル兄弟が、ときにそう見えたかもしれない以上におぞましいものたちであるということがわかったからだ。家に戻ると、予期していた通り、友人フォスから手紙が来ていることがわかった。その中でフォスはこう伝えていた。ゾフィー・パウルスは結婚式の夜に、完全に打ちひしがれた状態で家に戻ってきて、寝ていた老いた両親をノックで起こしてひどく驚かせた、

と。「そしてパウルス嬢はもはや以前と同じ人間ではありません。彼女の第一青春時代がもう過去のものとなってしまっていることは、今や一目瞭然なのです。そのピリピリした高ぶりようが、どういう状況のせいであろうにしてもです。」

しかしカロリーネは翌日ミュンヘンのマクスに宛てて、お父さんは今度は、彼がいない間自分が行ったすべての手配に完全に満足していると書いた。とりわけ、白く塗りかえた食堂をほめてくれ、書斎の隣に自分用の小さな寝室を設けるという考えもまた今では捨ててくれた。「そういうわけですから、私たちみんなの無事安泰がかかっていて、涙ぐましくなるくらいの愛情をもって私たちの心配をしてくれる、優しくて偉いお父さまの息づかいが、今では夜もと通り私の横で聞こえているわけなのです。何もかも好転していて、私たちは私たちの結婚生活の最初の頃と同じくらい幸せです。」

終

使用テキスト Walther Harich: Jean Paul in Heidelberg, 1929 Berlin/Itzehoe.

注『駒澤大学外国語論集』第 8 号所載の『小説・ハイデルベルクのジャン・パウル』の続きです。今回は全 67 頁のうち、47 頁途中（第四章の途中）から 66 頁までを訳出しました。最終頁 67 頁はアルフレート・クビーンのイラスト頁です。

『駒澤大学外国語論集』第 7 号所載「連載第一回」部分の訂正：11p16 行　シェルヴァー→シェルファー

飯　塚　公　夫

アルフレート・クビーン（1877-1959）のイラストより